



神
隠
し

序

普段と変わらない朝の始まりだった。

カーテンの外の天気は曇り気味のどんよりした鬱陶しい空。まったく気持ちの乗りようのない天気だが、いつものことだ。

お湯をわかしてコーヒーを入れてひとすすり。電車の時間が近づいてきたのであわてて家を出て会社へ向かう。

いつものように地下鉄にのって、スマートフォンで今日のニュースを見ていた。いつも通りのドタバタして前に進まない政治の記事や、戦争ばかりの国際ニュースなどを見ながらひとつだけ気になるニュース記事があった。

〇〇県填島町で数千人が失踪

填島町といえば私の勤務先のある町じゃないか。数千人が失踪？変なことがあるもんだ。なぜそんなことが起こるんだろう？誰のしわざだろう。こんなことが起こればすぐに誰の仕業かなんてわかるだろうに。

そうこうしている間に地下鉄が「填島駅」に着いたのでさっきの考えを忘れて私は降りた。改札口を定期券で出て、会社に近い3番出口を出て、このあたりの氏神様になる填島神社の中を歩いていけば歩いて3分で会社に着く。いつものように出て、填島神社の中を出た、はずだった。

いつも通りの風景のように見えた。けどいつもと違うなにがしかの違和感。何が違うのか。気づくのに少しの間が必要だった。そうだ、人が一人もいない。ここはビジネス街なので、この時間は出勤する人たちで賑やかなのに、誰もいない。閑散とした風景。そうだ、静かすぎるのだ。違和感の正体はそれだった。

ここで私のスマートフォンが鳴った。静かなのでなぜか不気味に響く電話の着信元は誰かとも告げてない。しかしなぜか着信してみる気持ちになった。静かすぎて誰かと話したかったのかもしれなかった。

「もしもし」

「オメデトウゴザイマス。アナタハ9999ニンメノプレイヤーデス。コノセカイヲイキノビテゲームヲクリアシテクダサイ」

機械が喋っているような音が聞こえてメッセージを言い終わるとプツツと切れた。これだけだった。

プレイヤー？ゲームだって？いったい、何が起こったんだ？

そういえば数千人の失踪ってあったよな。もしかして、これが原因だとしたら、だとしたら…。ちょっと混乱しかけていた私の前が急に暗くなった。上を見上げると、大きな黒い物体が私の目

の前に現れた。

黒光りするヌメツとしたボディ。黒い2つの目、2本のつものらしきもの、大きな鋏のようなあご、6本の脚、そう蟻だ！でもこんな大きな蟻なんて見たことがない。ゆうに6mを超えている。そしてその蟻の目は物語っている。私を捕食すると。

私は身動きできなかった。あまりの光景に金縛りになってしまったのだ。蟻が大きな顎をあけて私の頭に近づいてくる！

「助けてくれ！」

私が唯一出せた言葉。同時に手にもったスマートフォンがブルブルと反応する。

「了解。ガードモードに入ります」

ガキーン！

私はふっとんだ！ごろごろ転がりながら壁にぶつかる。何が起こったのかまったくわからなかったがとりあえず頭をかじられずには済んだようだ。だが、蟻はまたすばやく襲ってきた！さっきのは私のスマートフォンの仕業が！？よくわからないが信じるしかなかった。

「あれをやっつけろ！」

ありったけの声で叫んだ。

「了解。ソードモードに切り替えます」

手のスマートフォンがみるみる長い剣の形に変形していく。これでやれってのか？やるしかない！

うおおおおお、叫びながら蟻の頭の真ん中に剣を振り下ろした！

ガキーン！

うわっ！軽く跳ね返されてまた私が吹っ飛ばされた。地面に打ち付けられた身体の痛みよりもこれで切れるはずじゃなかったのか？と絶望した。なぜ？手の剣からその答えが流れてきた。

「レベル不足、レベル不足。破壊不可能」

レベルが足りないだって！？そんな、それじゃどうすれば。辺りを見回した。逃げれる場所は、いや、蟻のあのスピード、逃げることはできない。

蟻が殴られた怒りで赤い目をして襲ってきた。もうだめだ！と頭を抱えてうずくまったとき、ドン！一度地震のように地面が揺れてシーンとなった。

しばらくしてゆっくりと頭をあげると蟻がペしゃんこになってつぶれていた。いったい何が起こったんだ？どうやったらこんな風に蟻を潰せるんだ？

「大丈夫か」

潰れた蟻の後ろから声が聞こえた。背の高い華奢な体型の男だった。男は続けて話しかけてくる

「やばかったな。ケータイの使い方がなっちゃいないな。この辺はちょっとレベルが低いやつくる所じゃないぜ。おれは秋島。早く、もっと安全なところにいきな」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。私はここに来たばかりなんだ。ここはどこなんだ？あなたは何をしてるんだ？」

私は矢継ぎ早に質問をした。

「まずは礼を言ってもらいたいもんだが、来たばかりだと？新しいプレイヤーか。運の悪いところに飛ばされたもんだな」

「あ、すまなかった。助けてくれてありがとう。でさっきの質問なんだが」

「私もここがどこだか知らない。お前さんの知ってる通り、填島町だがいつもの填島町じゃない。おれもプレイヤーでね。楽しみのために戦ってる。もういいかな、人助けしてる場合じゃないんだ。他の獲物を狙いたいんでね。失礼するよ」

ここで一人になるわけにはいかないと直感が告げる。

「まってくれ！私は武山だ。お願いだ、一緒に連れていってくれ。出来ればこの世界のことを知ってるだけ教えてくほしいし、生き延びる術を教えてほしい。このケータイの使い方とか」

秋島は邪魔だといわんばかりの顔をしたが、

「まあ、この辺にほっといて勝手に死なれても寝覚めが悪いしな。ある程度まで手ほどきしてやる。あくまで基本までだ。あとは自分でやっていくんだぞ」

「ありがとう、よろしく頼むよ」

私は秋島の後ろを走って追いかけていった。

つづく